

価値観が多様化した社会に対応した教育の実現

—一元的な「正解」を求める公教育からの脱却を図るには—

水谷真奈
HS29-0143G

目次

- 1 はじめに
- 2 多様化する社会と教育の役割
 - 2.1 社会の変化と価値観の多様化
 - 2.2 教育の重要性
- 3 公教育の在り方
 - 3.1 好成績を追い求める教育システム
 - 3.2 成績と深く結びついている子どもたちの未来
- 4 公教育の変革
- 5 おわりに
- 参考文献

1 はじめに

私は、2019年9月から2020年2月までの半年に渡って、小学校でボランティアを経験した。この活動を通して感じたことは、子どもの多様化である。当たり前のことではあるが、様々な考え方、生き方をしている子どもがいる。確かに、学校は集団で生活をする場である。ある程度の決まりがあり、皆が決まりに従うことで、学習をする適切な環境や人と関わる適切な空間が作り出される。しかし、それは逆に子どもの自由な発想やありのままの感情を失わせてしまうのではないだろうか。

このような、「学校のルール」が適応される教育現場で、今注目されているのがアクティブ・ラーニング¹である。どの授業でも、「あなたは どう思いますか」「みんなと意見を交換しましょう」と、問題に対して深く考え、自分の意見を

¹ 学習者の能動的な参加を取り入れた授業、学習法の総称

持ち、それを表現することが重要視されている。しかし、普段から決まりに従って生活を送っていたら、問題に対する疑問や探求心は生まれにくい。また、うわべだけの意見交換がなされて、深い学びが出来たことにされ、授業が終わるということもあるようだ。

このように、公教育は学校運営の伝統に縛られているように感じる。学校において、もっと自由に、興味を持ったことにとことん向き合い、疑問を探求することは許されないのだろうか。

そこで本論文では今後の日本の公教育の在り方を模索する。これを通して、日本社会の教育に対する意識変革の足掛かりになることを目指したい。

2 多様化する社会と教育の役割

2.1 社会の変化と価値観の多様化

現在において、「幸せ」の形は人それぞれであり、「幸せ」になるための生き方は多種多様である。このような正解が一つとは限らない、先が読みにくい社会において、人が自分の居場所を見つけ、社会に何らかの役割を果たし、自身も充実感や達成感を得ながら人生を歩んでいくためには、思考力や判断力、また、それに対する責任を自らが負うことが必要になる。今まで国家や社会の風潮に身を任せていたが、これからは自分の力で生き方を模索していくことが求められている。

2.2 教育の重要性

教育は、次世代を担うことになる子どもたちに対して、発展し続ける社会を生きぬく力を養

うために、欠かすことができないものである。そして、子どもたちが教育を受ける場所として、多くの時間を過ごすことになる学校は、劇的に変化する社会に対応した教育を展開していくことが求められる。

3 公教育の在り方

公教育とは、日本国憲法で定められた教育を受ける権利を保障するために実施され、全国で統一された公的な教育である。

3.1 好成績を追い求める教育システム

公教育が普遍的であるために実施されるテストや成績評価が、今日ではどのような扱われ方をしているだろうか。何のための学習なのか、何のための学校生活なのか、子どもたちには考える暇も隙も与えられていない。子どもたちは、自分に本当に必要なものを見つけるために、目の前にあることに対して「考えて」「迷うこと」ができない。機械のように、与えられたものを指示されるままに勉強をしても、自分の本当の「幸せ」は手に入らない。ここには、良い点数、良い成績を取らざる負えない現行の教育システムに問題がある。現行の教育システムは、価値観が多様化した新しい社会に対応していないのだ。

3.2 成績と深く結びついている子どもたちの未来

成績が子どもたちの未来や日常生活と大きく結びついていることが、一元的な教育の見方から離れることができない原因である。成績は、一教師が、その子どもがその教科を取り組んでいる場面を一時的に見て評価したものに過ぎない。したがって、たかが成績で自分の全てを評価することはできない。教師の言うことが絶対ではない。成績評価の捉え方を変えることが、一元的な教育からの脱却につながる。

4 公教育の変革

教育の見方を変えることで、学校は以前とは全く違った性質を持ち始める。教育や学び

の目的を、生徒の成長や創造の発展に置くことで、言われたことを鵜呑みにするのではなく、その状況や環境において何を選択するかを模索する学習が生まれる。

しかし、このような授業が十分に実施できるほどの環境が、日本の学校には整っていないことが現状である。教師の授業づくりにかける時間の確保や、生徒が思うように調査、発見ができる社会の支えなど、学校教育の根本を変えたり、地域社会の協力を得ることが必要不可欠なのだ。

5 おわりに

今日の公教育は当然のことながら絶対的なものではない。しかし、その変容あるいはそこからの離脱は、簡単にできることではない。公教育の変革には学校教育を取り巻く周りの環境の変化が必要であり、教育関係者のみならず多くの人々が教育に対して「変える」意識を持たなくては実現しない。教育は、国家において何よりも重要な財産であると私は思う。未来を担う子どもたちの教育を重視することが、将来的に日本を救うことにつながっている。

6 主要参考・引用文献

大桃敏行,2020,「日本型公教育の再検討の課題」大桃敏行・背戸博史編著『日本型公教育の再検討 自由、保障、責任から考える』岩波書店,1-12

尾木直樹,2017,『取り残される日本の教育』講談社+α新書

志水宏吉,2019,『シリーズ・学力格差3 学校編 学力格差に向き合う学校』赤石書店

平田オリザ,2012,『わかりあえないことから』講談社現代新書

文部科学省,2019,『高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説 公民編』東洋館出版社

文部科学省ホームページ,学習指導要領「生きる力」